

○議長（中村 敦） 次は、質問順位 8 番、1 つ、地域社会・つながる下田と高校生通学補助について。

以上 1 件について、6 番 天野美香議員。

〔6 番 天野美香議員登壇〕

○6 番（天野美香） 6 番、市政会、天野でございます。議長の通告に従いまして、一般質問させていただきます。

質問の前に、能登半島地震発生によりまして被災されました方、貴い命を亡くされました方、今もなお不自由な生活を余儀なくされる方々に心よりお悔やみを申し上げるとともに、一日も早い復興を願うばかりでございます。

下田市においては、いよいよこの新庁舎へ一部開庁となります。3 月定例会最後の質問となり、この議場においても最後の一般質問となります。よろしくお願ひいたします。

1 つ、地域社会・つながる下田と高校生通学補助について、質問とする内容を通学補助、地域社会・つながる下田とし、要望を添えて質問させていただきます。

昨年、高校生通学補助について一般質問させていただきましたが、この近年、物価高の中、生活が厳しくなっています。日々の生活に欠かせない食料品や生活消耗品に加えてガソリンの値上げ、この現状に主婦である私自身も痛感しており、市民の多くも同じように実感していると思います。さらに2023年12月1日より、東海バスの運賃が平均22.84%値上りし、固定経費となる通学定期はさらに家庭に重くのしかかってきています。実際、定期代となる資料を配付させていただきましたので、御確認いただきたいと思います。

例えば 1 の住所を自宅とし、一家庭に高校生が 2 人いて、松崎高校と南伊豆分校に通うためにかかる通学定期代は年間51万5,850円、卒業までの3年間になると2人合わせての金額は154万7,550円、最も遠くなる2を住所として、下田高校と稲取高校に通うためにかかる通学定期代になりますと61万4,910円、3年間で2人合わせての金額は184万4,730円、住所によって定期代に差が大きく生じられ、所得による授業料無償化とはいえ定期代は多額のものであり、これら以外にも教育にかかる出費も必要となります。

一方で、高校生の日々の通学にかかる定期代は、公共交通の維持、存続にもつながり、地域社会基盤保持に欠かせないものであり、高校生等の通学に対する補助金によってお金を回す、すなわち経済を循環させる役割を果たすと言えることであると思います。

保護者の負担軽減は多額な交通費のためだけでなく、子供たち自身が学びたい場所で学べる環境をつくることであり、多額の交通費によって自転車通学せざるを得ない状況を減らす

ことで、交通事故の防止にもつながり子供たちを守ることでもあります。

そこで、幾つか質問させていただきます。

1として、下田市内に在住し自宅から通学する高校生への通学補助についてのお考えをお聞かせください。

2として、ほか周辺のまちでは既にこの補助金がなされておりますが、いまだ下田市としてなされていないことにおいてお考えをお聞かせください。

高校生通学補助についての質問と同様、教育は最も大切なことであると思います。その中において高等学校等、通信・専門・定時制様々ではありますが、子供たちの学びの場の確保とともに、学びたい場所で学べる環境をつくることの重要性も感じます。現在、地域社会の連携として、下田高校と高校の魅力化推進による「トークフォークダンス」などの取組をしていただいております。学べる環境があつてこそ、こうしたつながりができるわけです。

そこで、地域社会・つながる下田への要望も添えて幾つか質問させていただきます。

3として、高校との連携を図る中で、どのように地域の中でつなげられているのか状況をお聞かせください。

4として、要望ですが、学びの環境確保のため、義務教育外である高校生までの子供窓口として、新たに地域振興業務としての設置はできないか、お聞かせください。

5として、高校の魅力化についてどのようなお考えをお持ちであるか、市長よりお聞かせください。

この政策は、我がまち下田の魅力が大きく増進させることであり、子育てしやすい環境をつくること、広い社会へ向かうための準備をする子供たち、保護者を行政として支えることでもあります。そのために必要とされることとして通学補助であると思います。令和6年、新たに動き出すこの下田で子育てをしたいという人を増やし、この町で暮らす人たちが住みやすい地域社会をつくってこそ魅力ある豊かなまちとなる。魅力ある場所にこそ人が集まり、まちが自ずとつくられていくことと思います。

自然環境豊かな下田で子育てをし、先の未来へとつなげていけるように、子供たち自身が、子供たち自らが帰ってきたいと思えるふるさとを、行政として今から築いていくことが必要であると思います。当局の見解をお聞かせいただきたいと思います。また、最後に総括して市長のお考えをお聞かせいただきたいと思います。

以上で終わらせていただきます。よろしくお願いたします。

○議長（中村 敦） 当局の答弁を求めます。

教育長。

○教育長（山田貞己） 私からは、3つ目の高校との連携を図る中でどのように地域の中であつなげられるのか、その状況をということ。それから地域振興業務としての設置、続いて高校の魅力化、この3つについて、今日午前中に楠山議員とそれから昨日の岡崎議員の答弁と重複するところがあるかと思いますが、御容赦ください。

現在、高等学校は、これまで以上に地域に出向いて地域の方々との触れ合い、それから貢献的な活動をしてくださっています。下田高校は、黒船祭をはじめ桜、これから蓮台寺地区で始まります、しだれ桃の里まつり、それに合わせて行われる天神神社でのひな壇飾りと、そのほか市内で催されるイベント等に参加して南伊豆分校、松崎高校それから稲取高校でも同様の現れが各地域で見られています。それは皆さんも感じていらっしゃるかというふうに思います。

下田高校は特に地域連携に特化した校内分掌が出来上がっておりまして、担当の教員がついています。この蓮台寺のしだれ桃ですとか、そういったイベント等への参加も、その分掌での担当教員の取組、それから主体性を持った子供たちの取組につなげてもらっているところですよ。

それから先ほどトークフォークダンスのお話もありましたが、これもそれに参加した一般の方から、ぜひこれは続けてほしいという要望もたしか車座座談会の席で言われたこともございました。子供たちの気持ち、思い、未来への思いも分かったし、私たちの働く大人たちの気持ちも分かってもらいたいということで、とてもいい会だという、そんな評価をいただいております。

義務教育それから幼稚園、保育所、認定こども園も高校生が触れ合いの場を設けて意図的なつながりを持てる活動の様子を目にする機会が増えました。ここに二、三年、殊にその様子がうかがえると、そんな状況であると捉えています。今後もこのような活動を生かして、高校生と子供たちがコミュニケーションを取れる場が増えていくよう努めてまいりたいと思います。

また、幼保・小・中・高の体験から得るものを含めて、この学びの系統性というのは重視されています。これまでは小中の9年間の系統性というのはかなり重視されていますけれども、今後高校も含めて12年間の系統性、将来に向けてのということでも見直されていくのかなと私個人として感じています。そういった系統性、地域の中というよりもさらに広く見通しを持って取り組んでいかなければならないものと思っています。

それから地域振興業務ということなのですが、小学校、中学校においては現在進めておりますコミュニティスクールの取組を通じて、地域との連携がさらに強まることを期待しています。また地域連携とともに、これからは先ほど申し上げた小中高の連携も強めていくことも検討しているところでございますし、先ほども申し上げましたけれども、グローバルCITYプロジェクトで目指しております小中高連携の一環としての、未来の下田創造プロジェクトには高校の教員も参加してもらっています。学校と地域が連携を強めることを通じて地域振興につながっていくと捉えて、取組を考えてまいりたいと思っております。

高校の魅力化については岡崎議員の御質問にもお答えしたとおり、現在は県立高等学校の在り方に係る地域協議会賀茂地区版が開催されております。この協議会は昨日も申し上げましたけれども、37名ほどの協議会員で、第5回目を3月末に迎える予定です。この会においては繰り返しになりますが、県の池上教育長、高校の再編ありきで協議するものではないと、個別具体的な統合案を議論するつもりはない、統合させるという考えは全くないと、そこがスタートになっておりますので、魅力化に向けて様々な議論がこれから交わされるのかと思います。

今、高校はそれぞれが魅力化に向けて努力をしているなという、力を注いでいるなということが分かります。スパンを何年にするのかというのも大きな課題になりますし、そういうところで高校に協力していきたいという思いもあります。

高校の在り方の方向性、グランドデザインを3月末に作成するというところで進められているところでありますので、現在はそのグランドデザインがどのようなものになってくるかを待っているといった、そんな状況でございます。

私からは以上です。

○議長（中村 敦） 学校教育課長。

○学校教育課長（佐々木雅昭） それでは私のほうからは、1点目、2点目の御質問の通学費補助についての考えと、また下田市で実施されていないことについての考えということにお答え申し上げます。

高校生の通学費の補助につきましては、昨年6月の一般質問にて御質問があつて以降も、通学に係る定期代はもちろん、中学校卒業後の進学状況ですとか他市町で実施されております補助の状況等も併せ、幾つかのパターンで検討や試算は進めているところでございます。ただし6月にも申し上げましたとおり、公平性の確保ですとか補助の範囲等、整理がついていない部分もありまして、まだ政策として提案ができていない状況でございますので、現段

階で詳細な数字を明らかにすることはできませんけれども、地域振興あるいは少子化対策といたしましても有効な政策であると考えられますことから、高校へ進学する生徒の保護者からの意見聴取、また、近隣の状況も注視しながら、引き続き検討を進めたいと考えているところでございます。

私からは以上です。

○議長（中村 敦） 企画課長。

○企画課長（鈴木浩之） 県立高校ということで、県教委の所管ということもございまして、以前はなかなか交流ですとか連携が難しいという状況が正直ございました。先ほど教育長からもありましたけれども、近年、下田高校のほうから授業や学校行事における地域連携の取組を進めたいという、こういうお声をいただきまして、昨年度より下田市でも下田高校との連携の下、市として積極的に学校との取組を進めているところでございます。

主な取組としましては、グローバルCITYプロジェクトとしまして、総合的探究の時間と学校授業への市職員の講師派遣ですとか、大学連携の一環としまして、下田を訪れた留学生との交流事業の実施、またトークフォークダンス等、地域との交流事業のサポート、また教職員を含めました職員の交流事業等を実施してきております。

今後も引き続き、高校との連携を強化しまして高校の魅力化の支援を行うとともに、本市が進めておりますグローバルCITYプロジェクトの推進を図っていきたいと考えております。

今後、こうした地域連携の取組を拡充していくため連絡窓口の一本化をということで、高校側は新たに地域連携推進室という担当部署の設置をしていただいております。市側としましては企画課が窓口となりまして、相互に連携を取り合いますして情報の共有、連絡調整、事業の企画検討、事業の実施等を進めているところでございます。

以上でございます。

○議長（中村 敦） 6番 天野美香議員。

○6番（天野美香） 御答弁ありがとうございます。前後いたしますが、地域社会・つながる下田から一つずつ再質問をさせていただきたいと思っております。

3の高校との連携を図る中での取組、ありがとうございます。グローバルCITYプロジェクトとしての総合的探究の時間への様々な交流事業をしていただいているということです。そうした関わりの中でのことというのは学校側か、もし生徒さん側からのそういった声というのは届いてらっしゃるのでしょうか、あればお聞かせいただければと思います。

○議長（中村 敦） 企画課長。

○企画課長（鈴木浩之） 高校の先生、生徒さんから伺った意見としましては、どうしても今までやはり高校生は学校で授業をやって部活をやって自宅との往復という、そういう学校中心の生活が多かったんですけれども、こういう交流事業をやることによって地域の方と交流、触れ合う場が増えてきていると。そういうことの中で総合的探究の時間等におきましても、従来はインターネットとか本とか、そういうどちらかという知識中心に授業を進めていたところに、地域の方が入っていくことによってより地域の実態に沿った授業の深まりというのが見えるとか、あとは高校生もそういう地域に交流を持ちたいというような積極的な姿勢も見えているということで、高校の先生からも一定の評価をいただいておりますので、今後ますます進めたいという声のほうはいただいているところでございます。

以上でございます。

○議長（中村 敦） 6番 天野美香議員。

○6番（天野美香） ありがとうございます。やはり日々授業では学べないたくさんのごことをですね、特にトークフォークダンスもそうですが、年齢層の広い社会人との関わりというのは地域の連携による交流でありまして、生徒たちが多くのことを学ぶ機会であると思います。

市議会においても市民の皆様はもう御覧になって、皆様は御存じですが、市議会だよりの作成に下田高校の書道部さんと美術部さん、写真部さんの生徒さん、先生方の御尽力もいただきまして、新しい開かれた議会、より市民に寄り添い行政に関心を持っていただけるようにという取組も始めております。そうした身近なことこそ官民一体のつながりの一歩であり、地域と社会、その中で生まれるつながりができ、若い世代の意見を聞くという機会も大変重要かと思っておりますので、今後ともまた引き続き高校との連携を図っていただきまして、地域のつながりをよろしく願います。

4についてですが、先ほど課長、教育長からも御答弁いただきました。ありがとうございます。高校はやはりおっしゃるとおり県教委の所管であることから、賀茂地域の中に西伊豆南、西に松崎高校、東に稲取高校、下田に下田高校分校と、地元には高校はありながらもその窓口の場が必要ではないのかなと思っておりましたので、高校側がそういった地域の連携推進室、市側が企画課を窓口として地域との連携を拡充していただく調整をいただいていることは大変心強く思います。

また、昨日ですが岡崎議員と教育長の答弁にもございましたが、今後は高校において本当にいろいろと議論は、先ほどのお話にもありましたけれども、地元には高校を存続させること

は本当に最も重要なことであると思います。魅力化の推進の取組とともに地域の連携をさらにつなげていただきまして、またこれからを担う人材育成のために御協力をいただきたいと思ひます。

教育長の話にもありましたけれども、今は幼保、小・中・高の連携ということで、実際に私も保護者の一人でありますのでよく存じ上げているんですけども、やっぱり高校生が保育園でしたか、たしか実習に行ったことがあると思うんですけども、その学びの成長というのはやっぱり段階的にすごく感じますので、そういったことをしっかり連携していただけることは大変ありがたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

市長が後で御答弁いただけるということですので、通学補助について御答弁をありがとうございます。

1 についてです。前回のこの通学補助について質問していただき、その後、私もほかからの状況や取組に至るまでのことをリサーチしてまいりました。課長の答弁をありがとうございます。いろいろと調べていただいているようで、ありがとうございます。

既に2023年から1クラス減となりまして、さらに高校受験においては年々子供たちが分散せざるを得ない状況であり、通学費の負担が軽減する方向にはありません。

通学費補助においては、おっしゃるとおり様々な課題も生じようかと思ひますが、教育の均等、学びたい場所で学べる環境のためにも必要であることと考へます。前向きに検討をしていただけるとの御答弁、ありがとうございます。

どのような社会、世の中の情勢があろうと、子供たちの学びは止まることをございませぬし、本日より高校受験も行われております。今日、明日、初めての受験で緊張、不安の中で、子供たちも一生懸命チャレンジして頑張っていることと思ひます。ぜひそうした前向きに御検討していただける子供たちの学びの支援としまして、現実に向けていただけますことを期待したいと思ひます。

2 としまして、先ほど御答弁いただきましたが、ほか周辺では既になされており、河津町においては昨年4月から、南伊豆、西伊豆においても通学保障をなされている中で、下田市としてなぜという質問をさせていただきました。このことにおきまして市長の御答弁を求めさせていただきますと思ひます。

○議長（中村 敦） 市長。

○市長（松木正一郎） 今の天野議員の御質問は、周辺市町ではやってるけれども、この下田市内としてどうするのかという、こういう御指摘だと思うんです。言うまでもなく、今は中

学校が統合したことに伴って、その通学を義務教育ということもあってですね、無料のバスを走らせているわけです。一方で高校というのは、今多くの方が言っていますが、義務教育ではないという、そういった中でどこまで行政として補助すべきかというのはかなり難しい問題だと思います。

先ほど担当も申しましたけれども、公平性の観点から、これについてはしっかりと検討しなければならないと思います。一方で、議員御指摘のとおり実は学生が乗ってるということで、バス事業者の経営に対しての一定のその効果があると、これはもう御指摘のとおりでございます。公共交通という言葉は誰もが乗ることができるというのが公共交通の規定であって、公共が運営するという意味じゃないんです。だからその料金というのが、日本の場合は割とその事業者によって格差があって、都市部だと安いんだけども地方で乗る人が少なくなるとどうしても高くなってしまうと、こういうものがあります。だからこのように伊豆急にしても東海バスにしても割高になって、都会の人が伊東から乗り越しをして下田で精算するとびっくりすると、こういう時代になってるわけです。

都会などだともっとずっと安いのに、何でこんなに高いんだと言われるのは、そうしたそのマーケットの問題だというようなことになります。そこに毎日毎日乗ってくれる高校生というのは大きな、言ってみればその事業を支えてくれるお客様ということになるわけです。

それでこの高校生たちのその通学費を、では私たちが、あるいはもっと言ってしまうと納税者の高齢者の方々が負担することが本当に適切かどうかということについては、先ほど言いましたように難しい問題があって、一方で高齢者の買物の足、あるいは通院です。買物だけではなくて定期的な通院の足をどう確保するのかということのも、今同じように難しい問題というように言われています。これらを総合的に考える必要があるだろうと思っています。

明確な答えでなくて本当に恐縮なんですけれども、今言いましたように様々なことを複合的に考えて、政策についてこれから取り組んでまいります。

以上でございます。

○議長（中村 敦） 6番 天野美香議員。

○6番（天野美香） 御答弁、ありがとうございます。この通学補助に関しては、いろいろ様々に定額であるのか、よそがされてますように2分の1であるのか、そういった問題、また予算の問題等々、それで市長のおっしゃられますように高齢者の方々の、昨日も岡崎議員が一般質問いたしましたけれども、子供たちを支援するという、その手厚い子育てで支援、教育というのは本当に移住してくる方が望まれるのであれば、もう若年層がこちら下田で子育て



てをしたいと思うのは、やはり教育、子育て支援は手厚いものであることが確かであると私は思っております。でもしかし、この下田には御高齢の方もいらっしゃる、様々な方が一緒になって、そうやって地域をつくっていくということもよく実感しておりますので、ぜひともそういった中で、またこの補助について、ぜひ前向きに市長のほうも御検討をしていただきたいと思えます。

同じように、この過疎地域でありましても、ほかの岡山県の奈義町なんていうのは本当に人口がすごく少ない場所でありましたけれども、そういった子育て支援の取組ですとか、グローバルCITYプロジェクトと同様に英語教育を始めたり、そういったことで若年層の人口を増やしていらっしゃいますし、市長はよく御存じかと思えますけれども、神戸においてもお隣の大阪が高校授業料を無償化したということによりまして、この9月から約2万900人の高校生の通学補助をされます。

こちらもやっぱり人口流出を防ぐという、そういった目的もあることは伺いましたけれども、人が集まる、たくさんやっぱり高齢者の方々には元気でいただいて、人が集まるまちは本当に潤います。これから新庁舎も一部移転となり、また令和8年には全開庁となりますし、これからまたいろいろと新しく下田が変わっていく中で、ぜひ人口減少、少子化の進む中ではありますけれども、いかに人が集まりそこに定着して住み続けていただくか、また移住していただくかには、再度申し上げますがこの手厚い子育て支援は必ず必要と考えられます。

そういったことを踏まえまして再度市長の御意見をお伺いしたいんですが、一つ、昨日の施政方針にも掲げられていらっしゃいましたけれども、市長が言われている出生から18歳まで切れ目のない支援を実施すると施政方針ではおっしゃっておられました。ここの部分をぜひ子供の18歳までの支援をされるということも期待しまして、総括として市長のお考えを再度、もう一度お聞かせいただければと思えます。

○議長（中村 敦） 市長。

○市長（松木正一郎） ありがとうございます。天野議員の御指摘のとおり様々な事柄がこれから変わっていく。そうした中で、私が市長として今どういうビジョンを持っているのかと、とても大事なところですので、ちょっと時間を頂戴して申し上げたいと思えます。

まず、人口減少、少子高齢化というのは、現代世界において世界共通の先進国共通の課題だと思います。地球規模では人口の爆発は相変わらず続けていて、ちょっと前までブルゾンちえみが「男が何人いると思ってんの、35億」とうたってたわけですけど、もう40億になっているわけで、35億とついこの前うたってたと思うんですけども、もう80億、半分は40億

なんです。そのように世界では人口が爆発している。

悲しい話ですけれども、その社会環境が厳しいようなエリア、例えばイスラム地域だとか貧困になるようなグローバルサウスとか、そういうエリアだと人口がすごく増えていて、戦禍の中を子供たちが泣いているわけなんですけれども、一方で先進国はニーチェの予言のとおりというか、なぜか人々は私たちの今あるこの暮らしに満足して、なかなか子供が増えない。こういったその人口減少を残念ながら私たちはある程度、所要のものとして捉えなければならない。これを前提として、縮小型なんだけれども、緩やかに縮小するんだけれども、それでも幸せな社会というのを設計しなければならないと私は思っています。そうした意味で子育て、教育ということを天野議員はすごく重要視されています。私もそのとおりだと思います。

グローバルCITYプロジェクトというのは、それをある意味象徴する言葉として、あるいはそういう概念として私のほうで提唱させていただきました。1980年頃に出たこの概念を実は自分が入った大学でそういう言葉を聞いたのをどこかの心の中にあっただけです。それを言ったんです。そうしてある本を読んでいたら、ある人の論説の中にグローカリーという言葉があって驚いたんですけど、その40年ぐらい前のその本に、それは川勝平太という人が書いた本の中であってちょっと驚いたんです。全然違うのをちょっと探していたら、別のところでそんなのに出会って、そうか川勝知事はあの頃からもうグローバルという言葉を使ってたんだなというように思いました。

私どもが言っているグローバルCITYプロジェクトは、大きく分けて人づくりとまちづくりのこの2つになります。それでまちづくりというのは例えば海の環境保全、これは海の環境保全なんですけど、この海を通してまちをしっかりと観光でもよくしようと、それでまちの国際化とかあるいは下田ゆかりの文学だとか歴史への照射、光を当てるというそういうことをやっています。

それから人づくりだと国際感覚を持てる視野の広い子供にしたいというそういうこと、グローバルな子供にしようと、国連で働いてると思ったら、やっぱりあの子は下田出身だったと、宇宙ステーションに行ってる子は下田出身だったと、このように言えるような、そういう国際感覚を持たせたいと思っています。

昨年の7月に、黒船の関係で姉妹都市になっているニューポート市に中学生と一緒にいったときに、中学生に英語でしゃべりたいというように言っていた。英語でしゃべるのは・・・でしょう、だけど「I like Baseball」とか「I respect S

h o h e i O h t a n i」とか、そのぐらい言ったってその先がなければいけないので、それよりも君たちはアメリカ人に何を聞きたいのか、どんな話をしたいのか、何を違いとして感じているのかというのをぶつける、そういったものを用意してきなさいと、このようにして、それで向こうの市長さんがいい人で、一人一人とそういう時間を取ってくれて、テラスで話をしてくれました。領事の方がそこで通訳をしてくれたんですけども、それというのはとても貴重な体験になったと思います。

一方で、グローバルですから人づくりはふるさとを自慢する子供もつくりたいと思っています。私自身も前回出馬表明したときに、このまちが実は私は自慢で自慢でしようがない。もういろんなお客様が来たときに、自分がそのボランティアガイドのようにして、ここはこうなんだ、ここはこうなんだと名称をつけてます。その名称というのが、いわゆる観光の有名なところじゃなくて、ここのこの表札を見ると、ここに歌の師匠と書いてあるでしょう、この人はそうやって芸者さんに歌を教えた人ですよとか、ここに三味線屋さんがあるでしょう、これは何で三味線屋があるかというのと、お祭りがあるからですよと、そういうような感じで、このまちの文化と、それに関連している普通の暮らしに私はとても強く引かれるので、そういうところを連れて歩くわけです。自分自身も八幡神社の例大祭、いわゆる太鼓祭りに参加を20代からやってますし、太鼓保存会にも入って太鼓をたたいたりして、こういったのを私はこのまちの子供たちにもやっぱり同じように、このまちがもう好きでしようがないというようにすることが大事だろうと思います。

どうしても勉強して学歴をつけて東京に行く、そしてインターネットかパソコンかで知的な仕事をするという、そういったある意味プロトタイプというか、みんなが思っている普通の典型的な何か理想像みたいなものを夢に描いている子供が多いんじゃないかというように思いますが、そうではなくて、実は文化は地方にこそあるんだということを理解してもらいたいなと思っています。

この子供たちというのは小・中・高があるんですが、先ほど申し上げましたようにここには大学生がいない。だから大学生たちとの交流を進めたいと考えています。大学はないけれども大学生たちと交流する、大学というところは今は実社会に出て社会をよくするチャレンジというのを授業だとか研究の中で取り入れている、そういうところに取り入れているという今傾向があります。こうしたその潮流を私たちは捉えて、自治体と大学が連携して例えばこの下田のまちをよくする、あるいはこのまちの何らかのその課題、社会的な課題を解決するようなことを提案してもらって、こんなことをやってみたいと思っています。

例えば、旧市街地である商業的なエリア、それから吉佐美だとか白浜のような海の美しいところ、それから稲梓のほうのような中山間地、それぞれエリアの特性を踏まえて、あるいはそのエリアの中でインターチェンジができるんだとか、あるいはここでは空き家、空き店舗が多いんだとか、そういった現在のマイナス要因をそこで提示することで、実はそのマイナスはマイナスなので、プラスに転じることができる資源であるということで大学で考えてもらって、それを各大学で出してコンテストをするみたいな、まちづくりコンテストみたいな、そういうことができたらいんじゃないかと考えています。

昨年5月の連休明けにコロナが5類になりまして、ようやく元気な大学生をこのまちにたくさん呼び込むことができるようになった。私が就任した頃は、熱海の県境のところでは来ないでというのぼり旗を立てて、それで他県ナンバーの車には傷をつけると、こういう悲しいそういった人々の排外主義みたいなものが蔓延していましたがけれども、今は皆さん多分歓迎してくれるんじゃないかと思えます。

こういう社会の空気の変化を捉えて、この下田を、これから子供たちを国際的にも活躍できる、それでいてふるさとを誇りに思える、そういう子供が育てられるまち。逆に言えば、そういう子供にしたかったら下田で育てたいと、そういうふうなことを、東大に行きたかったら灘高に行くみたいな感じで、国連に行きたかったら下田で育てなさいみたいな、そんなまちになったらいいなと私はひそかにたくらんでいて、それをグローバルCITYの中に一つ一つ埋め込んでいきたいと思っております。

以上でございます。

○議長（中村 敦） 6番 天野美香議員。

○6番（天野美香） ありがとうございます。地域で育てるこの魅力、今回はそうしたことも含めましてこの2点の質問もさせていただきまして、市長の思いを聞かせていただいたことは市民の皆様にも届けられることであると思えます。まいた種は市長は育てるとおっしゃってましたし、先ほど申し上げましたけど、自分ほど下田を自慢している人はいないと新聞にも掲載されてましたのを私も拝見いたしました。

大学生もそうですけど、関わりによってはやっぱり体験するということはとても体と心と全てが覚える重要なことでもありますし、幼保、小・中・高、そこでまた大学、その連携のつながりというのはすごく大切に思います。保護者の支えはもちろんでございますけれど、教育に関しては教育委員会、また教職員の諸先生方、地域の方々、そして行政、多くの方の支えによって本当に子供たちというのは先の未来で育つものであると思えます。これだけ素晴

らしい自然環境の下で、今暮らす市民が安心して過ごせることに加えて、市長の言われる住んでよかった、訪れてよかったの思いのように、今はいかに今住む市民が豊かに子育てをできるか、地域を活性化していくかということで、このまちが活性化し、御高齢者の方々も元気に過ごしていただけるように、つながる下田のさらなる構築のため、これからを担うこの市の宝であります子供たち、寄り添う保護者をまた市として支えていただき、応援していただければと思います。市長のぜひチャレンジ、そして大きな御決断を期待し質問を終わらせていただきます。

○議長（中村 敦） これをもって、6番 天野美香議員の一般質問を終わります。